

# しんがりの思想

## 知性の公共的使用のために

### 鷲田清一

(大谷大学文学部教授)

#### Kiyokazu Washida

1949年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。哲学・倫理学専攻。関西大学教授、大阪大学教授、大阪大学総長などを歴任。著書に『分散する理性』、『モードの迷宮』(ともにサントリー学芸賞)、『人称と行為』、『だれのための仕事』、『悲鳴をあげる身体』、『メルロ＝ポンティ』、『「聴く」ことの力』、『思考のエシックス』など。

### 孤立する困窮

「われわれは公民として病みかつ貧しいのであった」。昭和五年、柳田國男がその著『明治大正史・世相篇』の末尾に書きしるしたことばである。それから八十余年、いまわたしたちはこのことばを乗り越えたといえるだろうか。

この本を書いた一九三〇年と現在とはほとんど変わっていないことがわかる。

自殺者の数は、日露戦争から太平洋戦争まで、戦時下は若干の減少がみられるが、より強い相関をしめしているのは景気動向との関連である。戦後日本社会をみると、自殺者増加の第一期は「なべ底不況」の一九五〇年代後半に重なり、第二期はオイルショック以降の景気低迷の時期とほぼ重なる。逆に、岩戸景気(一九五八―六一)、オリンピック景気(一九六二―六四)、いざなぎ景気(一九六五―七〇)、バブル景気(一九八七―九一)といった好景気の時代には自殺者数は大幅に減少し、バブルがはじけて以降はふたたび増加、二万人台前半がしばらく続くが、一九九八年に突然、三万二千人と急増し(とくに中年以上の死亡率の上昇がめだつ)、その後現在までずっと年三万人を超えてきた。自殺者数の歴史的推移をめぐっては、年齢別・性別の自殺率の差異、都市部と郊外と地方との比較、推測される自殺理由などを仔細に分析する必要があるが、いまいちど確認しておきたいのは、戦後第三期ともいうべきこの一三年間の自殺率が、柳田がその急増を憂えた八〇年前のそれとほぼ同率だとい

たとえば自死。わが国の自殺者の数は一三年連続で三万人を超えており、このことが、「無縁死」の増加とともに、近年話題になっていくが、柳田もまたこの本のなかで自殺者数の増加にふれ、自殺者が毎年一万数千、東京では日換算して毎日五人が自死していると述べている。一九三〇年当時の人口は六四四五万で現在のおよそ半分である。そして二〇一〇年の統計では自殺者は三万一九〇人であるから、自殺者数の人口比率はじつは柳田が

ことである。

八〇年前、貧困と病による自殺や一家心中の急増のなかに柳田が見てとつたのは、「説くにも忍びざる孤立感」というものであった。過去に貧窮が苛烈であったとき、それでもまだいまより忍びうるものであったのは、貧窮が人びとを一樣に襲っていたからである。人びとはたがい協力して救済にあたつた。つまり「共同防貧」のしくみがまだ生きていた。ところが、と柳田はいう。「われわれの生活ぶりが思い思いになつて、衣でも食住でもまたその生産でも、個人の考え次第に区々に分かれるような時代が来ると、災害には共通のものが追い追いと少なく、貧は孤立であり、従つてその防禦も独力でなければならぬように、傾いて来る」。そして、この「孤立貧」こそ時代の「社会病」であり、「しばしば実情の相似ている貧窮が、地をかえ時を前後して発現していることを学ぶ」ことが、現下の課題であるという。いずこかの一家心中の報道も、場合によってはその当事者がじぶんであつてもおかしくないという思いで読むこと、いいかえると、その悲痛な出来事を「われわれ」のひとつの〈典型〉として受けとめる必要があるというのである。